

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

取り組みレポート-わらべうたのニーズと必要とされる授業展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學教育開発推進機構 公開日: 2023-02-09 キーワード: 作成者: 小野寺, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002077

わらべうたのニーズと必要とされる授業展開 The effective lesson plan for the demand of "Warabeuta"

小野寺節子

【要 旨】

この稿は、本校文学部開講の「日本民俗学」における「わらべうた」を中心とした授業展開について述べたものである。日本のわらべうたは、収集分類、資料集成の作成、歌謡や民謡研究との関わり、地域の民俗伝承と子どもの世界、歌の音楽学的分析などの研究期を経て、学校教育や生涯学習の現場における教材化や実践報告、日本の子ども文化における位置付けに達していることが、多くの研究者や関係者によって認識されている。筆者は、これまでに地域伝承の調査、わらべうたの資料収集に関わる機会を多く得てきたことから、大学の文学系学部で、歌の伝承性や口承性を機軸にした科目や、生涯学習や社会教育の講座で、わらべうたを取り上げる機会が少なくない。

そうした中で、受講生の要望をみると、地域伝承の芸能や歌の背景・機能などに関心を持ち、それらの民俗的な基盤、口承文学研究としての方法、将来に継承していく具体的な内容と方法を求めている状況がアンケートなどから出ていた。とくに大学卒業後、教員や地方公務員となり、地域の伝承文化と向き合う立場に置かれたり、それらを教材や行事企画の核にし、自らがパフォーマーの側に立たされたりすることが現実としてある。

ここでは、筆者が携わった取り組みの一端を示しながら、伝承文化としての「わらべうた」の捉え方や機能、「わらべうた」のコミュニケーションツールとしての役割と具現化などについて考察し、課題を提示するものである。

【キーワード】

受講生の要望 わらべうた 民俗的背景 コミュニケーションツール 楽曲の記号化

【Abstract】

This article describes the course of Japanese folklore study focusing on "Warabeuta" offered by Literature Department of Kokugakuin University. The article examines the needs of Warabeuta in terms of a Japanese course subject and a communication tool, and the needs of class development in respects of class evaluation and contents. Furthermore, the most important point is to examine the position of "Warabeuta" in Japanese folklore and the ways how to use it as a communication tool. "Warabeuta" is a collection of traditional songs, regional folk songs, and songs to identify children's territory, which are widely used by researchers for the analysis of musicology. It is recognized as Japanese culture of children by many researchers and parties concerned for Warabeuta. Until now, the author has long been doing research on country folksongs and collecting data of them, and applied them to the instructions at university courses, life-long education courses, and social study courses. According to the results of a questionnaire, students seem to have interest in the background information of performing art and music. As most of them are expected to become teachers or local public servants after graduation, it is assumed that they need to develop teaching materials, plan events, face traditional culture, and even stand in the position of a performer. It is hoped that this article could show one aspect of this attempt of using "Warabeuta" as the method to permeate Japanese tradition in teaching literature courses.

【Keywords】

Student needs; Warabe-uta (traditional children's songs); ethnical background; communication tool; symbolization of music

はじめに

日本のわらべうたについては、収集分類、資料集成の作成などの資料収集期や、歌謡や民謡研究との関わり、地域の民俗伝承と子どもの世界、歌の音楽学的分析などの研究期を経て、日本の子ども文化における位置付け、学校教育や生涯学習の現場における教材化や実践報告に達していることを、多くの研究者が認識している。

筆者は、これまでに地域伝承の調査などから、わらべうたの資料収集に関わる機会を多く得てきた。また、大学の文学系学部で、伝承性や口承性を機軸にした枠組みの講座を担当したり、生涯学習や社会教育の講座においても、わらべうたを取り上げたりする機会が少なくない。

そうした中で、講座の性格と受講生の要望をみると、①地域伝承の芸能や歌の背景・機能などに関心を持ち、それらの②民俗的な基盤、③口承文学研究としての方法、④将来に継承していく重要性などについて、具体的な内容と方法を求めている状況がアンケートなどにも浮上している。とくに大学での受講生が卒業後、教員や地方公務員となっていく場合、直に地域の伝承文化と向き合う立場に置かれたり、それらを教材や行事企画の核にし、自らがパフォーマーの側に立たされたりすることも少なくないという現実がある。

ここでは、筆者が平成15年から22年まで8年間携わった本学文学部における講座の取り組みの一端を示しながら、「わらべうた」の捉え方や機能、受講生への理解やその役割の具現化などについて考察し、課題を提示するものである。

1、わらべうたのニーズ

1) 科目の「日本民俗学」と「わらべうた」

筆者は、本学において平成15年から8年間、「日本民俗学」を担当した。このときの講義概要は、日本民俗学と民俗芸能を中心とする内容を用意した。通年授業であるために、前期では日本民俗学の全般的な把握を掲げ、後期前半では民俗芸能領域、後半では特定の事例を挙げていった。期末の記述式の授業感想などをみていくと、次第に民謡やわらべうたなどの「歌」に受講生の関心と興味が窺えるようになり、さらに学生の印象深い内容として、「わらべうた」への記述が多くなっていった。これを踏まえ、前期に日本民俗学と民俗芸能の概要を講義し、後期には「わらべうた」を基にした民俗学の授業展開に移行していった。

平成22年前期のレポートの中に、要望の例として、

- ・「自分は公務員か図書館員を目指しているので、そうなれたときは昔話や伝説を取り

上げた企画を立ててみたいと考えており、そのような形で口承文芸研究を活かせたら良いと思っている」(文学部日本文学科3年男子学生)

- ・「後期の予定は、歌詞から背景となる地域性や、社会性を探る、信仰とわらべ歌など、その歌ができる背景などを見ていくようなので、とても楽しみです」(同4年女子学生)
- ・「私は法学部で、民俗学には初めて触れました。地域ごとにある行事や、地域ごとに違うわらべうた、知れば知るほどおもしろく思います。祖母から聞いたわらべうたというのは、今祖母は思いつかないといって見つかりませんが、私に孫ができたとき、歌ってあげられたら楽しいだろうなと思っています」(法学部法律学科4年男子学生)

などがあった。〔受講生数75名による〕

これらの例は一部であるが、自分自身に関わる歌の記憶が喚起され、具体的な体験によって、感性や感覚的なものが認知され、理性や意識的なものに変化したことが窺える。すでに、学生の多くは、日常的にわらべうたを歌ったり、わらべうたを掛け声や伴奏にして遊んだりした世代ではなく、保育所や幼児教育の場、テレビ放映などを通して、アレンジされたりバリエーションの歌や遊びを体得している世代である。

しかし、歌や遊びを体験し体現することで、前世代からの感性の伝承性、現状ではコミュニケーションツール (communication tool) としての有効性、将来への継承性に気付く。

2) コミュニケーションツールとしての「わらべうた」

日本のわらべうたは、近世初期頃からの伝承童謡集として行智編『童謡集』文政3年頃(1820)・小寺玉晃『尾張童遊集』天保2年成(1831)などがあり、『あづま流行 時代子供うた』(岡本昆石編)は、明治27年(1894)に刊行されたが、江戸末期の江戸の童唄や童言葉243編(手毬唄は38編)を収録している。明治期の日本民謡集成類、大正3年(1928)『俚謡集』、4年の『続俚謡集』、昭和から平成期にかけての地方別や地区別の『日本民謡大観』(日本放送協会)、都道府県別『民謡緊急調査報告書』(各都道府県)、『日本わらべ歌全集』(柳原書店)などの集成を経て、歌と遊びを相関させた分類が示されている。たとえば、わらべうたは<遊び歌・言葉遊び歌・子守り歌>と大別され、遊び歌の中に<まりつき歌・お手玉歌・手合せ歌>などがあり、さらに<まりつき歌>の中にまりつきの歌々が分類されている。【資料1】

これらの分類には、単に種類を分けるだけでなく、歌と連動する歌い手の動作の有無、歌い手以外の人々との句詞の交換といった要素も含まれており、わらべうたによって「一緒に遊ぶ」「一緒に歌う」行為を可能にしている。子ども同士の遊び、大人同士の共有、初対面同士のコミュニケーションを図るツールとして有効的であり、学生の理解の中には、「コミュニケーションツール」という指摘が新鮮な視点であったと思われる。

2、必要とされる授業展開

つぎに、授業の位置付けとその展開、具体的な内容を挙げる。

1) 授業の位置付け

本校の学部は、文学部（日本文学科・中国文学科・外国語文化学科）・経済学部・法学部・神道文化学部・人間開発学部、及び大学院から成る。文学部日本文学科は、「古代から現代に至る広範囲の文学・言語・風俗習慣・儀礼などの研究を通して、日本文化を総合的・体系的に理解することを目的とし」という目的と目標により、日本文学専攻・日本語学専攻・伝承文学専攻の3専攻及び書道課程によって構成されている。

伝承文学専攻は、「昔話・伝説などのように言葉によって、民俗儀礼などのように行為によって、そして民具のように形象によって伝達継承されてきた文化を対象とする。具体的には、伝承性の高い説話文学や歌謡などの文学を取り上げるとともに、日本民俗学の理論的な枠組みを学び、日本の民俗文化の特質を明らかにすることを目標とする」とある。

〔文章文言は、國學院大學HP、2008年7月28日更新 による〕

平成19年度の場合だが、伝承文学コース専攻授業は、次のようなものがあった。

- ・伝承文学史 伝承文学基礎研究法 伝承文学概説 伝承文学講読 伝承文学演習
- ・口承文芸研究 口承文芸研究・口承文芸論 東アジア比較文学
- ・日本民俗学 5講座 比較民俗研究
- ・儀礼文化論 現代文化論・映像文化論 伝承文学思想・民俗研究思想 主題講座

また、大学院では、伝承文学史 伝承文学特論 民俗学研究 民俗学特論 儀礼文化研究などが開講されている。筆者は、「日本民俗学」の1講座で、「わらべうた」を扱った。

2) 「日本民俗学」の授業

平成22年度の場合、担当科目のシラバス作成では、作成すべき項目に従い、「講義テーマ」と〈講義の目的・内容〉〈到達目標〉〈講義計画〉などについて、以下のものを挙げた。

〔平成22年度「日本民俗学」（小野寺）シラバスによる〕

専門教育科目「日本民俗学」（小野寺節子）講義テーマ：民俗と「わらべうた」の伝承
〈講義の目的・内容〉

我々の暮らしの中で伝承されてきた歌や芸能は、体現される音・声や芸態であると同時に、瞬時に消滅する特性をもち、その部分に人々は知恵や感性を結実させてきた。人々の身近にある「わらべうた」を具体的な素材として、「民俗と歌や芸能の伝承論」を講義する。必要な民俗学の領域、民俗芸能研究の基礎、生きた芸能や音楽の捉え方、過去からの伝承や未来への継承の問題点などを提示する。

〈到達目標〉

- 【知識・理解】日本民俗学の領域を説明できる。わらべうたの領域を理解し、説明できる。
- 【思考・判断】わらべうたの背景にある伝承文化を述べるができる。
- 【関心・意欲】日常生活で見聞きするわらべうたや芸能に関心をもつ。
- 【技能・表現】コミュニケーションツールとして、わらべうたを活用できる。

〈講義計画〉

前期は、おもに日本民俗学の領域、民俗芸能研究の基礎、わらべうたの視点について、後期は、「わらべうたと民俗の諸相との関わり」及び具体的な歌を挙げていく。現代的な活用や継承、地域学習や生涯学習などの取り組み方などに触れ、芸能や歌を核とした伝承文化への理解を探っていく。

- ・前期—はじめに、授業内容と進め方について、日本民俗学の領域1～3、学史、範囲と分類について、諸相1（社会構成・通過儀礼・生業・衣食住）、諸相2（年中行事・信仰・芸能・口承文芸）、民俗芸能研究の基礎1～3、民俗学と民俗芸能について、芸能史学と無形の伝承について、身体表現と無形文化の継承について、わらべうたの視点1～3、わらべうたと民俗伝承、まとめ。
- ・後期—わらべうたと社会伝承1～3、わらべうたと経済伝承1～2、わらべうたと信仰伝承1～2、わらべうたと芸能（口承）伝承1～3、わらべうたと芸能伝承4～5、わらべうたと現代社会、まとめ。

3) 具体的な内容について

前述の講義内容は、【表1】に整理した。ここでは、授業回数を第1～20回に設定し、それぞれの回は、a項目・b内容・c歌や事例・d関連事項とし、内容のポイント部分を以下に示す。

<第2回－b内容>

「童謡」という詞の用いられ方の概略を捉え、歌謡学史の中での位置付け、近世・近代期に収集されたおもな資料の内容、それらの分類方法などについて提示する。

「童謡」の用い方は、町田嘉章・浅野建二編『わらべうた—日本の伝承童謡—』（岩波書店 昭和37年）などでも下記のように捉えられているが、近代以降の子どもが歌う歌は、伝承童謡を越えたり、創作された歌が積極的に用いられたりしている。唱歌やラジオ歌謡、遊びに伴う歌は自由な発想がふんだんに取り込まれている。

わらべことばは、上代の童謡わざうたは風刺・比喩の歌謡。平安後期の童謡わらべうたは風俗神事歌舞への男女児の参加により歌われるようになった歌。中世以降では巷歌・口遊・小歌などともいう。伝承童謡は、平安期の催馬楽・今様の収録歌謡と今日の伝承童謡とが接近。『讃岐典侍日記』天仁元年（1108）の「降れ降れこ雪」→「雪やこんこん 霰やこんこん」などが

ある。近世初期頃からの伝承童謡集として行智編『童謡集』文政3年頃（1820）・小寺玉晃『尾張童遊集』天保2年成（1831）などがある。創作童謡は、大正中期から昭和初期に作られた童謡。鈴木三重吉の雑誌『赤い鳥』大正7年（1918）、北原白秋・西条八十・野口雨情などの作詞活動。昭和30年代までのラジオ歌謡など。唱歌は、学制の制定 明治5年（1872）、文部省『小学唱歌集』明治14年（1881）の編集刊行。あそびうたは、遊びとともに歌われる歌をいう。

伝承童謡と資料集では、近世中期の刊行本を捉える必要がある。その後のわらべうた分類項目の基盤が作られる時期でもある。尾原昭夫『近世童謡童遊集』（日本わらべ歌全集27 柳原書店 平成3年）には、新しく翻刻された資料が収録されている。『童謡集』^{どうようしゅう} 行智 文政3年（1820）は、現存する童歌集として、最も古いといわれる。行智（安永7年（1778）生）は江戸浅草覚畔院の僧で、童歌を子守唄（寝させ唄・目ざめ唄・あそばせ唄）・鬼わたし・まりうた・天象などに分類した。『熱田手毬歌』^{あつた てまりうた}（高橋仙果 天保元年（1830）頃）や『尾張童遊集』^{おわりどうゆうしゅう}（小寺玉晃 天保2年）、『童謡集』^{どうようしゅう}（行智）や『幼稚遊 昔雛形』^{おさなあそびむかしひながた}（万亭応賀 天保15年（1844））などと比較することで、全国的な流布や東西地域の相違などを考察することとなる。『あづま流行 時代子供うた』（岡本昆石編）は、明治27年（1894）に刊行されたが、江戸末期の江戸の童唄や童言葉243編（手毬唄38編）を収録。同編者による『古今百風 吾妻余波』^{あづまのなごり} 明治18年（1885）刊には、童戯122図が掲載されている。

<2-c>

〔今制の手鞠 かんや手まり（揚げまり）〕とは、『守貞漫稿』に記載されている記事で、「今制の手鞠、大中小種々ともに蚕糸を以て巻き飾る。其糸五彩を交へたり。中心蛤殻等砂を入れ、振レ之に音あり。貝殻の表にはほそき鋸屑を以て包レ之、其表に真綿を包み、其表に五彩糸を巻く。大なるは直径五六寸、小なる五七分也。此五七分の小なるは京坂にて「かんや手まり」と云。拍用に非ず。小鞠二三顆を片手に持ち、一つを揚げ落来る間に残れるを揚げ代る戯也。無患子を以ても行レ之ことあり。」とあり、揚げて遊ぶ毬の具体的な記述である。

<3-b>

わらべうたの文芸性と音楽性について、文芸性は、物語的内容と、アクセントや表現などの特徴が表れる言語（方言）的視点を捉え、音楽性は、単語・句詞・詞章などと音韻・音節・フレーズなどとの関わりを軸とする。

わらべうたについて、歌詞は、擬態語や擬音語・単語・詞章など、楽曲は、2音構成・拍感・詞と音の一致などから、その形態を捉えることができる。研究領域からわらべうたをみると、歌謡学では、文献解釈・学説比較・研究史系譜など、口承文芸学では、「読む・語る・唱える・歌う」・採集資料集成・分類など、民俗学では、地域伝承採集・個人伝承採集・資料構築など、音楽学では、楽曲構造・音や語彙の相関などが考えられる。

ちなみに、フィールドワークで採録したり偶然に現地収録することができたりした音源と、音楽的な処理と加工を加えた児童合唱の音源を授業で試聴し、その感想を求めると、素朴な音や歌への関心と、調和された音の心地よさや安心の両方が出てくる。

<5 - b>

民俗学の領域とその内容を確認しておく。民俗学の領域論とさまざまな分類は、前期に提示してあるが、ここではその後の共通認識をもつために、確認を行う。

- 1 社会伝承—社会構成・人生儀礼、 2 経済伝承—生業・衣食住、 3 信仰伝承—一年中行事・信仰、 4 芸能伝承—芸能・口承文芸

以下、民俗学領域を基にしたわらべうたの位置付けを示したものである。

<第7～13回 - c 歌詞や事例>

【事例1】「ずいずいずっころばし」

遊びの歌>遊びの始めの歌>鬼決めの歌、または、遊びの歌>身体遊びの歌>指遊びの歌

♪ずいずいずっころばし ごま味噌ずい 茶壺に追われて トッピンシャン 抜けたーら ドンドコショ 俵のネズミが 米喰ってチュウ チュウチュウチュウ おっとさんが呼んでも おっかさんが呼んでも 行きっこなあし 井戸のまわりでお茶碗欠いたの だあれ はい私 (あなた、△△さん)

・分類では2種類の捉え方ができるが、集団で親指と人指し指を握った手を出し合い、一人がその指の輪を指していき、最後に指された者が鬼やオヤになる。

【事例2】「バカカバ チンドンヤ」

言葉遊びの歌>言葉の歌>悪態の歌

♪バカカバ チンドンヤ お前のかーさん 出べそ

・子ども同士の悪態歌であり、茶化しの歌でもあった。

【事例3】「ジャンケンポン」

遊びの歌>遊びの始めの歌>順番・鬼決めの歌

♪ジャンケン ポン あいこで しよ

♪チッチッ チ

♪チッカッ ポ

・「逆ジャンケン」は青森県津軽地方などで行われていた事例があり、今日の拳の勝負と逆の勝負となる。ゲーはチョキに勝つがパーには負ける。これが逆になり、ゲーはパーに勝ちチョキに負ける。昭和20年代生まれの人々は、孫たちとのジャンケンに戸惑ったという。拳の名称では、パーは風呂敷・紙、チョキは鋏・鉄砲 (人指し指と親指を出す)、ゲー

は石・ゲンコツなどといわれていた。

【事例4】「おじさん 何処だい」

言葉遊びの歌>言葉の歌>悪態の歌

♪ (問い) おじさん 何処だい (応え) △△だ (問いかけた者) どおりで お手々が (△△が) 真っ黒けのけ

・炭焼きなどの生業と山里の暮らしが表れた歌で、悪態やからかいである。大人がそれを承知で、子どもに対応していた様子が窺える。

【事例6】「丸かいてちゃん」

言葉遊びの歌>言葉の歌>絵描き歌

♪ 1 丸かいて ちゃん 2 丸かいて ちゃん 3 横々 4 縦々 5 丸かいて 6 ちゃん 7 のんきな 8 とうさん 9 毛が三本 10 おっと 11 たまげた 12 おかみさん

・歌詞に合わせて絵を描いていく。最後の絵は、思いもよらない形になる。描くことと出来上がった形のおもしろさがある。

〈東京／『いたばしの民謡とわらべうた』 p26 板橋区教育委員会 平成15年〉

【事例8】「正月はええもんだ」

言葉遊びの歌>歳時の歌>正月の歌

♪ 正月は ええもんだ 赤いべべ着て 羽子(はね)ついて 譲りの葉のよな 餅食って 木片(こっば)のような 魚(とと)添えて 正月は ええもんだ

♪ 正月 が一つがつ が一つの処(とこ)へ 行ったれば 芋煮て 隠いて 蕪(かアぶら)煮て 突き出した

・正月の儀礼食や遊びが描かれている。

〈愛知／町田嘉章・浅野建二編『わらべうた—日本の伝承童謡—』 p190〉

【事例12】「提灯行列」

言葉遊びの歌>歳時の歌>盆の歌

♪ 提灯行列 始まった おかめに ひょっとこ ハゲ ドンドン 〈埼玉／盆唄〉

・盆行事と子女の様子を歌ったもので、広く関東地域などでも行われていた「ボンボン」という女の子がほおずき提灯を下げ、町中を巡る行事で歌った(唱えた)ものである。

【事例13】「亥の子」

言葉遊びの歌>歳時の歌>亥の子の歌

♪ 亥の子 亥の子 亥の子餅 搗いた 繁昌せ 繁昌せ 亥の子さん 町の方へ 行

かんちかー 行く気のな お白粉（しろい）つけて 紅つけて コッチャお白粉つ
けて 紅つけて 六方へ繁昌せ

〈広島／町田嘉章・浅野建二編『わらべうた—日本の伝承童謡—』p215〉

【事例14】「十日夜」

言葉遊びの歌＞歳時の歌＞十日夜の歌

♪十日夜 十日夜 朝そば切りに 昼だんご 夕飯くったら ひっぱたけ

♪十日夜 十日夜 朝ぼた餅に 昼だんご 夕そば食ったら ひっぱたけ

〈埼玉／十日夜の歌〉

・事例13・14は、旧暦10月10日に行う予祝行事と子どもの行事が混在する。儀礼食は、日本の東西地域、畑作と米作地域の違いなどが歌詞に表れている。子どもたちが地区や家々を巡るときに地面を打ちつける藁鉄砲は、藁を束ね二つ折りにし、折ったところが持ち手となるようにし、地面に当てる部分を縄で巻いていく。製作方法は父から子へ、兄から弟へとといった伝習がみられる。

<14-c>

・明治期以降の作曲された唱歌、明治期末から大正期にかけて創作された童謡などの内容と、子どもの遊びへの流用について、触れておく。まりつきやお手玉のようなフレーズ感のある遊びの伴奏には、西洋音楽的な楽曲フレーズを簡単に用いることができた。

<15-b・c>

・「早物語」の文芸性と内容の滑稽さは、物語を聴くような面白さがあり、東北地域などでは、採集事例が多い。収録資料の所在として、『青森県史 民俗編 資料南部』（青森県平成13年）掲載の「事例1～12」を挙げ、具体的な内容を学んだ。【資料2】

<16-c>

【事例27～38】として、「数え歌」の形式を提示。「いちに さんし」のような数を直接歌詞とするもの、「イチジク ニンジン」のような句詞に数の音韻をふくむもの、「一番はじめは一の宮 二は日光の東照宮」のように詞章として数を重ねるものなどがあり、まりつきやお手玉などの遊びのフレーズと合致しやすい。事例は、埼玉県的事例として、小野寺節子・斎藤紀子『埼玉神奈川のわらべ歌』日本わらべ歌全集8（柳原書店 昭和56年）収録の12曲を挙げた。

<17-c>

・江戸期から明治初期の浮世絵に描かれた子どもや遊びの様子や、『古今百風 吾妻余波』などにみられる遊び方などをみたり、邦楽曲の題材ともなった四季や十二月の情景と楽

曲を比較したりすることができる。

<18-c>

・江戸祭り囃子のヒトツパヤシの構成、山車や舞台で獅子や狐、おかめやひよっとこの踊りが加わるようになったこと、その楽曲「鎌倉」「ねんねこ」などには、眠らせ歌の「子守り歌」が流用挿入されていることなどを提示する。

歌の継承の重要性と方法などについて、<19-b など>の部分で説明していったが、次のような点を指摘することができる。

①わらべうたの歌い手

- ・大人が子ども（乳幼児）に歌う→ 聞かせる、遊ばせる
- ・子どもが歌う→歌って遊ぶ、遊びの合図・掛け声、心情を歌う
- ・大人が歌う → 歌の豊かさや懐かしさを味わいながら歌う

②伝承の仕方

- ・歌の転用 例) 数え歌 → まりつき歌・お手玉歌、寒さや月の歌 → 眠らせ歌
- ・歌詞の差替え 例) 「山王のお猿さんは」(千代田区日枝神社) → 「松山のお稲荷さんは」(埼玉県東松山市箭弓稲荷神社)
- ・都会⇄地方、賑わいから日常へ、大人から子どもへ

③伝達方法の工夫

- ・歌を譜例によって提示することができるが、実際には音符と五線による記述への抵抗感は少なくない。学生の意識としても、「音楽や楽譜はわからない」「苦手だ」といった感想がある。しかし、伝達は西洋音楽の記譜だけが方法ではない。例として、「田遊びの譜例」(東京都板橋区徳丸北野神社の田遊び「田植え」より)では、西洋音楽の記譜を基とするが、音の高低や長短を示している。こうしたもので楽曲の概要が理解できる。伝達を念頭に置いた場合、工夫を施す余地はたくさんあることを提示した。

④再びコミュニケーションツールとしての役割

- ・「遊びの伴奏」と「歌の叙情」 — 子どもには実際の用途、大人には思慕
- ・隔世代伝承 — 祖父母から孫へ

以上のような内容を含み、授業の中では、全員で指遊び歌「子どもと子どもでケンカして」を覚え、自分の掌を胸の前で合わせ、小指から順に両手の指を打ちならしていく遊びを体験し、小グループによる自己紹介や逆ジャンケンで勝負を決め、トーナメント式に全員で勝者を選出するといったワークショップを取り入れた。

そして、授業評価としてのレポートと試験は、次のような設問をした。

前期の課題レポートでは、①日本民俗学の領域（ここでは8領域を設定）の中から関心のある領域をあげ、研究方法を示せ。②身近なわらべうたを3点挙げ（文献資料または

フィールドワーク可)、歌詞・解釈・背景、聞き取りの場合は話者情報(氏名・生年・歌を覚えた地域など)を添付すること。

後期の授業時間内記述式試験では、1、わらべうたの伝承文化の魅力として、①民俗伝承、②口承性、③コミュニケーションツール について、具体的に記述せよ。2、わらべうたの収集に関して、A文献(既存資料)・Bフィールドワーク(採集資料)から選び、④具体的な方法を記述せよ。

後期試験では、授業感想を含む回答が多くみられ、とくに自分とコミュニケーションツールとの関わりを述べる学生が見受けられた。

- ・「わらべうたはお年寄りから幼い子どもまで、幅広い年齢の人々と交流する際、話のきっかけとしてとても役立つ。たとえば、祖父母が孫に昔のわらべうたを教えたり、公民館や小学校にはわらべうたや昔の遊びの達人(地域のお年寄り)を呼んで、子どもたちに地域の大人と触れあう機会を作っているところもある。また、世代間という縦のつながりのみならず、育った地域の違う人と初対面で何を話したら良いか考えたとき、お互いの育った地域、地方のわらべうたや、それに伴った遊びを教え合ったりすると、他の地域ならではのものがあったり、似たような歌を自分もうたっていたら、話が盛り上がり、横のつながりにも役に立つ」(神道文化学科3年女子学生)
- ・「コミュニケーションツールとして。自分が小さい頃に歌っていた、または聞いていたわらべうたを知りあった人に知っているかどうかを尋ねるなどコミュニケーションツールとしての役割も果たしている。これは自分や相手の思い出や経験に基づいており、地域や伝承者の違いなどか歌詞やルール、遊び方などに違いをもたらす。相手にわらべうたのことを聴くと、相手のことや育った地域の特徴といったことがわかるということが魅力である。また、その違いについて、盛り上がるので経たな話をするよりも話が弾むという場合もあると思われる。よって話下手な人にはうってつけのツールであると思われる」(日本文学科伝承文学専攻3年女子学生)

おわりに

「わらべうた」を取り上げた背景として、授業の位置付け・学生の意向アンケート回答などを基としており、わらべうたの歌謡史的な流れには深く触れず、地域伝承的な広がりを軸としたが、コミュニケーションツールとしての役割は多大である。遊びという動作や身体表現と歌との相関では、楽曲としての構成を学ぶことは重要であるが、ここでは音楽学的な構造論や分析を探究するものではない。

逆に、平成14年度より、音楽科の学校教育の中で日本音楽が取り上げられるようになったが、教員養成の日本音楽や音楽教育学系統のカリキュラムでは、通年授業として「わらべうた」を取り上げる余裕がないという。あえて発言するなら、音の分析や教材研究の素材としてわらべうたが取り上げられるが、歌の背景や伝承について、より深く探求し、伝承の思いや継承へのまなざしを湛えた「息遣いのある素材」として、大いに活用していく

ことを望みたい。また、反対に音楽学の立場に立つと、伝承性の提示や記述に対して客観性の有無に懐疑的であることを挙げることも少なくない。音楽学の立場にあって、地域伝承の歌や刊行物の所在に当たれなかったり、自らのフィールドワークによる採集ではないことから、作成資料に隔たりを抱くこともあつたりするという。わらべうたの音楽は、楽曲記述の基本を理解しつつ、事例に即した記述方法の試みや工夫の余地があり、その方法の普遍性を探り、理解を求めることが重要であろう。【資料3】

現代生活の中で、「わらべうた」が日常の歌や遊びと直結することは皆無に等しいともいわれる。だが、わらべうたは身体感覚に馴染み、自己を通じた伝承や継承の実感が得やすい。歌謡史研究や口承文芸を軸とした歌の扱い、及び〈伝承〉をテーマとしたアプローチを学ぶ文学部系学生が社会人となったとき、他分野からのアプローチの相違を理解し、現場で成果を抽出するためには、協力や共同作業が重要であることも強調したい。

「わらべうた」は、幼児教育や生涯教育の場では活用され、そうした場赴く機会のある学生にとって、その効用を大いに利用していくとよい。その理解を構築すべき努力は、専門領域を超え、教員の側にもあると考える。

この稿は、本校文学部でのわらべうたを核とした授業の取り組み方を、日本民俗音楽学会第24回東京大会（平成22年12月18日）で「文学部系授業におけるわらべうたの扱い」として発表を行ったが、これを基に加筆し作成したものである。

引用・参考文献

- ・『いたばしの民謡とわらべうた』p26他 板橋区教育委員会 平成15年
- ・町田嘉章・浅野建二編『わらべうた－日本の伝承童謡－』p190、p276～277他 岩波書店 昭和37年
- ・尾原昭夫『近世童謡童遊集』日本わらべ歌全集27 柳原書店 平成3年
- ・『埼玉の民謡』埼玉県教育委員会 昭和56年
- ・早物語「はいはいの物語」（譜例）『青森県史 民俗編 資料南部』p473～478 青森県 平成13年
- ・小野寺節子・斎藤紀子『埼玉神奈川のわらべ歌』日本わらべ歌全集8 柳原書店 昭和56年
- ・徳丸田遊び「田植え」（譜例）『板橋区史 資料編5 民俗』p902 板橋区 平成9年

【資料2】歌と物語の関わりについて

早物語「はいはいの物語」

伝承者 沢口たま(M37生)
採集者 佐々木達司
採譜者 小野寺節子

♩ = 152

ゆんべうまれたたろう はこめかみたい こめかみたい こめかみたからたをつくれ
たをつくればどろがつく どろがつけばかわさはいれ かわさはいればながれる
ながれだらヨシさとっつかれ ヨシさとっつかればてがきれ る てがきれたら
むぎのこまぶせ むぎのこまぶせば ハエがたかる はいはい ものがたりかたりせうろう

歌詞

昨夜生まれた太郎は 米噛みたい 米噛みたい
米噛みたから田を作れ 田作れば泥が付く
泥が付いたら川さはいれ 川にはいれば流れる
流れたらヨシさとっつかれ ヨシさとっつかれば手が切れる
手が切れたら麦の粉まぶせ 麦の粉まぶせば蠅がたがる
はいはいの物語語り候

- ・ 問答式の対話が歌詞となり、話の内容をやり取りする。

〔『青森県史 民俗編 資料南部』 p473 青森県 平成13年〕

【資料3】 楽曲記述の一例

徳丸田遊び「田植え」

♩ = 72-76
<大箱本>

徳丸北野神社
田遊び保存会
採譜 小野節子

ぜんこうじのによらいのそろのきのそろのはの
うわばのしたばのなかのおもいはを
それをまた(りよ)しんないないにうえもうしたよ
かれなるようにうえもうしたよ
かしまどんのだいなるかしまどんのだいなる
しなのどんのだいなるしなのどんのだいなる
(い)え)ついたがくぐ(か)い(か)ついたがくぐ(か)い(か)
はーねをならべてみあげるち(いち)いは
それをまたしんないないにうえもうしたよ
かれなるようにうえもうしたよ

楽曲記述について

・一線に小節線を設け、上部には音の長さを示す記号を用いる。下部には音の高低を示す○記を示し、上下を合わせると楽曲の様子が提示できる。音の高さは、数名が語るように歌う(唱え)ために、歌い手全員の正確なユニゾン歌唱ではないことによる。

〔『板橋区史 資料編5 民俗』p902 板橋区 平成9年〕

【表1】「わらべうたの内容」

回数	項目 (a)	内容 (b)	歌・事例など (c)	関連事項 (d)
1	わらべうたとは	「読む・語る・唱える・歌う」こととわらべうた		
2	視点1 「童謡」の歴史、資料集成・研究史	「童謡」の用い方 伝承童謡と資料集	「今制の手鞠 かんや手まり (揚げまり)」について	
3	視点2 わらべうたの文芸性と音楽性	わらべうたの形態 わらべうたの研究と方法		
4	視点3 歌の体験、遊びの合図・掛声、抒情喚起、コミュニケーションツール	他者・自身の体験 具体的な遊びと歌		
5	わらべうたと民俗伝承	歌の背景や民俗伝承の所在を捉える方法 民俗学の領域と内容の確認		
6	まとめ、レポート作成	フィールドワークについて		
7	わらべうたと社会伝承1	歌詞の背景にある地域性を探る	【事例1】「ずいずいずこぼし」(遊びの歌>遊びの始めの歌>鬼決めの歌、遊びの歌>身体遊びの歌>指遊びの歌)	・ごま味噌 ・茶の献上道中
8	わらべうたと社会伝承2	歌詞の背景にある社会性を探る	【事例2】「バカカバ」(言葉遊びの歌>言葉の歌>悪態の歌)	・滑稽と卑下
9	わらべうたと社会伝承3	子どもの世界のルールと歌	【事例3】「ジャンケンボン」(遊びの歌>遊びの始めの歌>順番・鬼決めの歌) 【事例4】「お月さんいくつ」(言葉遊びの歌>天体気象の歌>月の歌)	・逆ジャンケン ・拳の名称 ・人生儀礼
10	わらべうたと経済伝承1	歌と生業や交易などの係わり	【事例5】「おじさん 何処だい」(言葉遊びの歌>言葉の歌>悪態の歌)	・炭焼きと山里
11	わらべうたと経済伝承2	計量や工程を示すわらべうた	【事例6】「丸かいてちよん」(言葉遊びの歌>言葉の歌>絵描き歌) 【事例7】「函館土手から」(遊びの歌>身体遊びの歌>手合わせ歌)	・酒作り歌や道歌の役割
12	わらべうたと信仰伝承1	年中行事と子どもの係わり	【事例8】「正月はええもんだ」(言葉遊びの歌>歳時の歌>正月の歌) 【事例9】「七草なずな」(言葉遊びの歌>歳時の歌>七草の歌) 【事例10】「斎の神」(左義長) (言葉遊びの歌>歳時の歌>左義長の歌) 【事例11】「おんごく」(言葉遊びの歌>歳時の歌>盆の歌) 【事例12】「提灯行列」(言葉遊びの歌>歳時の歌>盆の歌)	・儀礼食 ・盆と子女 ・盆行事
13	わらべうたと信仰伝承2	祈りとわらべうた	【事例13】「亥の子」(言葉遊びの歌>歳時の歌>亥の子の歌) 【事例14】「十日夜」(言葉遊びの歌>歳時の歌>十日夜の歌)	・儀礼食(東西地域、畑作と米作地域) ・薬鉄砲の製作
14	わらべうたと芸能(口承)伝承1	伝説や昔話とわらべうた	近代の唱歌と童謡	
15	わらべうたと芸能(口承)伝承2	早物語とわらべうた	【事例15~26】「早物語」と歌	・語り物 ・てんば話 ・伝承地の地域性
16	わらべうたと芸能(口承)伝承3	言葉遊びとわらべうた	【事例27~38】「数え歌」の形式	・音韻・句詞頭・詞章 ・繁用性 ・大人の歌との交流

17	わらべうたと芸能伝承4	子どもの遊び（芸能）とわらべうた	浮世絵・邦楽曲と遊び	
18	わらべうたと芸能伝承5	芸能の取り込み、芸能に組み込まれたわらべうた	江戸祭囃子「鎌倉」「ねんねこ」	・眠らせ歌 ・ヒトッパヤシの構成
19	わらべうたと現代社会	歌の継承 再びコミュニケーションツールとしての役割		
20	まとめ			

〔平成22年度「日本民俗学」小野寺による〕